

## 鳥のイメージと舞踊表現

フランク・ホッフ・川路明・目代清（司会）

目代 鳥と舞踊という関係は非常に幅広く、民族を越えている部分が多分にございます。そして、おそらく人間の舞踊というものが形作られることにも、大変な役割を果たしてきているという気がいたします。舞踊学会で「鳥のイメージと舞踊」というタイトルでシンポジウムが行われますのは初めてです。ですから、色々な問題がでてきてもかまわないではないかということで、いわば資料を紹介するというような感じもあろうかと思いますが、そのような形式で進めさせて頂きたいと思っております。先生方をご紹介申し上げます。トロント大学のフランク・ホッフ先生は舞踊研究がご専門です。それからバレエ協会の川路明先生は、色々な芸術祭にも参加されてまして、本日は舞踊表現のなかの、鳥の特殊性のお話をいただけたと思います。私は司会を勤めさせて頂きます目代と申します。

フランク・ホッフ 「鳥のイメージと舞踊表現」という大変に意義の深い問題を授かりまして嬉しく思っております。「鳥のイメージと舞踊表現」という問題は明確な定義は下しにくいかもしれませんが、一つの国の舞踊を研究するための課題として考える場合に、その国の様々な舞や踊りを、唯一の見地で考察したり観察したりすることに、関心を強く呼び起こすのは確かです。同時に、一つの国の様々な舞や踊りやダンス、本来は違った類のものを全く同じ次元のものとして考えるのは、「こういう見方が投げかけることが妥当か」ということを定義することが、知見的な問題と考えられます。これは実例をあげて説明致しますと、日本の民俗芸能に「鶯舞」がございます。この、風流である「鶯舞」と、次に現れてくる能の『鶯』という曲とでは、果たしてどういうふうに関係を認めることができるのでしょうか。私が能の『鶯』という曲を一番最初に習った頃、東京の郊外に行きますと、よく鶯がいました。ある時、私の父はそれを見て、「お能の『鶯』もあの足だ、きっと、あれを良く見てやるのだねえ」と言いました。ですが、私が子供の時のことですから、その足など、解るはずがありません。その後、父が動物園へ連れて行ってくれました。郊外で見る鶯よりも良く見ることができまして、ここでの鶯は片足を上げています。例の一本足で立っている姿ですが、私は不思議でたまりませんでした。父は「あれは足を曲げて腹のところにつけているのだよ」と言い

ました。能の『鶯』に、鶯足という、足をスーと上げるところがあります。そして実際に鶯を見に連れて行ってくれた時に、「本物の鶯はあのように足が曲げられるから、足を下ろすときに爪先から下ろすのだ」という説明もされましたので、それを真似て、足を抜くことだけは誉められるようになりました。また、「鳥のイメージと舞踊表現」という問題では、見方を変えて舞踊を見てみますと、全く違った歴史的、社会的、経済的背景を持った、国境を越えた幾つかの国々のなかで成立してきた舞踊を、考察する見地から見ると、かけ離れた国々の様々なダンスを関係づけるのも、当然、必要となるでしょう。学問の発端としましては、最初の段階で、それぞれの国々のダンスに現れる鳥のイメージをただ羅列するだけでも、それなりの意義はあります。鳥のイメージというものを、統計的に羅列することは手間がかかる仕事ですが、そこに新しい学問の出発点を探し出せる入り口を見いだせるのではないのでしょうか。ですから、アジアの舞踊研究の研究者や演じる人々の集まりを計画する際にも、鳥のイメージは学会でとりあげるテーマとして適切で意義の深いアプローチであると考えられます。

国際集会を準備するに当たっても、個人の研究課題を考えるに当たっても、鳥のイメージは文学や美術は勿論のこと、民俗学や宗教など、国民的な関わり合いを齎せるのに、大変に有効であると考えられ、幅の広いアプローチです。去年、ハワイ大学で行われたアジア舞踊研究会では、フィリピンの踊りにおける鳥のイメージの論文が、既に発表されております。舞踊の動きで鳥のイメージと連想されやすいのは、跳ねるという跳躍運動です。バレエダンサーのニジンスキーについて、「彼は鳥のように飛び出しながら舞台を横切り、決して帰ってこないかのように高く遠く飛び上がって舞台から消えた」という、ニジンスキーが鳥をイメージした跳躍運動を特徴とした舞踊のことを著したものがあります。ところがこのような跳躍運動が特徴でないダンスは、鳥以外の動物もイメージの中心とすることが十分に考えられるのではないのでしょうか。この比較作品研究を通して指摘したことの一つは、両者が人間の執着、執念を動物に託した表現方法を適用したことです。これをてっとり早い方法で明らかにするには、「猫の所作」という水木辰之助による舞踊があります。こ

れは元禄四年、『四季御所桜』で「槍踊り」と「猫の所作」で大当たりをとったものです。その「猫の所作」の内容についての言い伝えが（山東）京伝に、「猫の所作の意趣は、はる姫のやくにて、恋したふ男、我実の兄なることしれて、夫婦と成がたきをかなしむ折ふし、兄弟のねこの恋するのを見てうらやみ、つひに我身ねことなりて、胡蝶にくるふ狂言なり。これを辰之助がねこの狂言とて、むかし人ののちのちまでかたりぐさにせしとよ」と書いてあります。とにかく鳥の問題に限らなくても、芸能作品を比較研究する時には、どうしても舞踊の足の動きに注目しなければならないということが言えると思います。

川路 私の場合は人間と重力の関係ということで話をすすめたと思います。と申しましても、決して難しいことではございません。昔から人間というものは、神話にもみられる通り、鳥のように羽を広げて大空を飛ぶこと、これは昔からの人類の希望です。とにかく人間は、昔から空を飛ぶために、ある人は背中に羽をつけて飛んで死んでしまったこともあった。では何故、人間は空を飛びたかったのか、と申しますと、人間はやはり四六時中、重力の束縛をうけているわけですから、その重力の束縛から離れたくてしかたがないのも無理はない。重力の束縛と申しますと大げさなことになりますので、「自分は重力の束縛などは全然感じたことはない」とおっしゃる方もいるかと思えます。しかし、例えば地下鉄の駅などで何時間も地下で過ごしていたとして、エスカレーターで地上に出てきた時に、「やれやれ」と思うでしょう。このことが、日頃から皆さんが重力に束縛をうけている証拠なのです。それから乗り物などに乗ったときに席に腰かけて「どっこいしょ」と言ったりしますが、これも重力の束縛をうけている証拠です。「やれやれ」とか「どっこいしょ」とか「うんとこさ」とか「やれとこさ」とか、これらの表現はすべて重力からの束縛の証拠で、皆さんはそれほどに重力の束縛を受けてるのです。

我々、バレエダンサーは、この重力の束縛との戦いが生活の全てだといってよいと思います。まず、重力の束縛を減らすための第一の手段として、自分の体重を減らさなければならない。まず自分の体重を減らしますが、体重をいくら減らしてもやわな筋肉では駄目ですから、重力に絶えるために筋肉を鍛えることも我々は毎日欠かしません。強い筋肉を鍛えるということは、今度はそれを繋ぐ靭帯が弱くてはダメです。それから今度は骨が強くなってはなりません。ともあれ、我々人間というものは、日頃から重力の束縛というものを毎日、感じているのでありまして、重力の束縛から人間を解放するための説にこんなことがあります。それはピラミッドです。ピラミッドはご存じの通

り、大変に大きな石でできています。あの石はどのようにして運んだのでしょうか。ある人の説によりますと、あの大きな石の下に葦の葉を一枚ひきます。古代の人々はそれで重力を消して軽々と大きくて重い石を運び、あの巨大なピラミッドができたそうです。つまり、このようにして人間というものは昔から重力というものと葛藤してきたということです。そして人間はやがて車輪というものを作り出しました。この車輪というものの発明によって、これを二つ並べて車にして馬や牛にひかせた。これで人間は遥かに速いスピードで仕事もでき、遠くまで行くことも可能になったわけです。今では著しい発展を遂げて、電車はおろか、飛行機まであって、人間が空を飛ぶことも、もう鳥なんて問題にならないほど速く飛ぶことができます。それから水の中でも、人間はもうイルカなんて問題にならないほどに速く泳ぐことも可能になりました。そして陸上でも、新幹線などによって、人間はどこへでも速く走って行けるようになりました。こうして人間は重力を押さえて速く動けることが可能になったわけで、これが現代なのです。しかし、そうなるやうな面白くも、「機械に頼らないで自分の筋肉の力で空を飛んでみたい」という欲望が逆に強くなるものです。バレエの場合には、自分の筋肉の力のみで重力に挑戦します。こわは大変に壮大なものです。この、バレエの壮大さというものが、現代、世界で起こっているバレエブームの原因の一つと考えられます。殊に、ニューヨークにおけるバレエ団は大変なものなのですけれども、この頂点にたっているのが、ミハイル・バリシニコフという素晴らしいダンサーです。彼は重力への挑戦という高度なテクニクをもっております。しかしバレエの場合、重力と戦っていてもそのことをあからさまにすることを嫌うのです。例えば、お相撲のような格闘競技は、凄まじいまでの重力と重力との戦いが醍醐味であります。野球の場合でも、ピッチャーは弾丸のような球を投げ、バッターがこれを力一杯打つということ。つまり、あからさまな重力の戦いを観戦するわけでありまして。ところがバレエの場合には、重力との戦いを表出するものではないので、それだけに技術的には、更に大変なものになってくるわけです。しかし、男性舞踊手の場合は、重力を押さえて女性舞踊手の身体を持ち上げる。このように、重力との戦いが見えた方がよいことも時にはありますが、原則としてはバレエは重力との戦いを見せない。舞踊手は重力をコントロールして、観客に重力の存在を忘れさせてしまうのが、バレエの重要なテーマです。その方法は時代によって色々と異なっており、アンナ・パブロワの時代と我々の時代では大変違います。パブロワの時代は曲線的な傾向がございまして、我々の時

代になりますと、大変に直線的になっております。ひとつの例として、アンナ・パブロワの師匠のエンリコ・チュケッティのひとつの動きのなかに、シャンピマピエーというのがあります。‘シャンピマ’は「速い」ということ、‘ピエー’は「足」です。このなかでもグランシャンピマピエー、つまり大きなシャンピマピエーの場合ですと、飛び上がって空中で膝を4分の1だけ曲げます。膝を曲げるといことは、伸ばしているよりは少なくとも地上より高く飛び上がっているように見えるからです。そういう意味で軽さを演出するという事で考え出したのでしょう。現在、私たちのしておりますグランシャンピマピエーというのは、飛び上がって空中でピタッと両足をあわせて、膝も完全に伸ばします。そしてこの体制をできるだけ長く保ちまして、これを最後まで続けます。我々はこのように直線的な力になります。このように昔と今とでは曲線的と直線的というような違いがございます。そして、アンナ・パブロワの時代のバレエダンサーは、現在のバレエダンサーと比べますと太めであるという違いもあります。ではあるけれどバレエというものが重力をコントロールして、そういうものを観客に忘れさせようしているという原則に変わりはないのです。

重力の存在から一番解放されているのが鳥です。自分の筋肉の力であれだけ飛んでしまうのですから。その鳥に、鳥の扮装の二つを結びつけば、きっとバレエができる。このように考えて『白鳥の湖』ができた。と考えるのは大きな間違いで、全く関係ありません。『白鳥の湖』というのは、チャイコフスキー作曲で1877年、モスクワで初演されたバレエですが、ここには重力の束縛からの解放などという近代的な考え方は勿論なかったと思います。しかし、鳥というものとダンサーというものを結びつけることによって、何らかの新しい表現、動きがでてくるのではないか。そういうことを予感して創られたものであると考えられます。このようにして人間が鳥を模倣して踊る場合、一番便利なことは、鳥も人間も頭が一つ、手が二本で、これは鳥の翼になり、足も二本であるということです。人間も鳥も四つ足でないということで、人間と鳥の構造が、ある程度似ているわけです。ですが、人間は鳥のように空を飛ぶことができませんし、逆に鳥は人間のように歩くことができません。ですから人間は鳥を真似しやすいということになります。『白鳥の湖』の場合ですと、第二幕で上手から白鳥が羽ばたきながら登場してクロスして座る。これは白鳥がバタバタと水面に降りてきたことを連想させ、非常によくできていると思います。それから、オデット姫が虫をついばんでいる仕草がありますが、これはオデット姫の悲しみを表現しているという人もおります。これはい

づれの解釈も正しく、鳥の習性というものを上手く利用して、そのなかに人間の悲しみの仕草も含ませてあるわけです。そして、その後のアラベスクもまた、白鳥を上手く表現している動きであると思います。そして一番面白いのは、『白鳥の湖』の第二幕で、これは夜です。『白鳥の湖』の話によると、夜というのは白鳥が人間に戻っているわけですから、ここでは鳥ではなく人間の振り付けになるはずですが、しかしここでも白鳥の振り付けをすることで、昼間は白鳥であるということを観客にアピールしているわけです。こう考えると非常に単純ではありますが、見事な表現方法です。バレエでの鳥の表現には、この『白鳥の湖』以外にも、『眠りの森の美女』に登場する青い鳥があります。この青い鳥は女と男が登場しますが、これは女の方は王女様でありまして、男の方だけが鳥なのです。ですが女の方にもなかなか鳥のイメージがあります。それから男のバリエーションの方では、鳥の羽ばたきをイメージさせる動きがふんだんにあります。いづれにしても、バレエでの鳥の動きというものは、バレエダンサーの鍛え上げた身体のキレによって、一層軽く、美しく見えるということがあるわけです。従って鳥を題材としたバレエ作品というものは、非常に数が多いように思われます。これは誰でもそのように考えますし、私もそのように考えておりました。しかし調べてみますと、およそ200以上あるバレエ作品の内、5つ程しか、鳥を題材としたバレエ作品はなく、結局、バレエでは鳥をテーマにした作品が少ない。それから鳥の名前をつけたものも少ないということになります。ということは、バレエにおける重力への挑戦ということは、単に飛ぶことだけでないということになります。重力への挑戦ということは、体重の自分の重心を、ある一定のところから、次の一定に移すこと。こういうことを滑らかに早く移す技術が大切になります。このように自由自在に重力をコントロールできる力がバレエダンサーの使命です。それから空中で姿勢を保つことも重力との戦いです。従って、鳥が飛ぶというイメージはバレエにとりましては、ほんの一部しか占めていないということです。

目代 それでは、日本舞踊を中心にお話をさせて頂きたいと思います。先ほど、川路先生のお話の中に、バレエには鳥を題材にした作品が5つ程しかないということがございました。そのことは歌舞伎舞踊にも言えます。現在、行われている350曲くらいの舞踊作品の中から“鳥”を探してみました。日本舞踊とバレエのどこが違うかと申しますと、歌詞を使うか使わないかということですから、350あまりの日本舞踊の伝統的な歌謡の歌詞のなかから“鳥”をひきだしてみました。そのなかからでてきた鳥の種類は33種類で、全部が小型

の鳥ばかりでした。白鳥のような素晴らしい鳥は一羽もなく、せいぜい鶯がでてくるくらいです。33種類のなかでベスト1は不如帰で、これは万葉集でお馴染みです。ということは日本人は不如帰程度の規模の鳥を愛好する民族ということになり、特に俳句の上では初夏の季語にまでなっているわけです。歌舞伎舞踊も不如帰が圧倒的で、鶯は二度しかでてきません。『鶯娘』がそのひとつで、他には「鳥づくし」のなかについて出てくるようなものです。ですから如何に『鶯娘』が特殊な作品であるかということがお分かりかと思えます。他に、『鴛鴦』というものなどは、鳥のイメージではありますが、結局は人間の恋人同士に見立てたものです。ですから、この作品のなかで特別、鳥の生態を見せるというような、『鶯娘』のような振りはないわけです。つまり日本舞踊作品のなかに鳥が33種類でてまいりましても、鶯は別として、全て、鳥の名前が出てくれば、手を羽ばたかせる動作をするしかない。つまり、やりようがないわけです。ですから日本人の短い手を利用して、着物の袂も利用して鳥の羽を表現するしかないわけです。ですが、『鶯娘』は大変に古い日本の舞踊ではありますが、これを独立させて復活したのは九代目市川團十郎で、およそ150年経ってからのものです。九代目團十郎は大層、写実の演技をする人でありましたから、それまでの、素朴な鶯の舞踊の振り付けなかに、写実的な表現を加えた。さらに、それに加えて、アンナ・パブロワの『瀨死の白鳥』を観たことによって、歌舞伎舞踊にも『瀨死の白鳥』風の写実が取り入れられたわけです。ですから、日本舞踊に鳥は沢山でてきますが、それは装飾的な表現、つまり人物を説明するのに装飾的な手段として鳥を使うことはするけれども、芸術に鳥を求めるということは非常に貧困です。日本舞踊より以前の能においては、それなりの方法があるかと思いますが、ともあれ、今、申しました「不如帰」というのが、言葉としては非常によく使われるということで、この場合、手は鳥の羽に見立てて羽ばたいています。しかし目は人間の目で、飛んでいる鳥を追いかけている。こういうふうに分身は鳥になっても、目は逃げていく鳥を追いかけているという二重表現が、主として不如帰に使われているテクニックです。二重表現と申しましたけれども、実はその前に、鳥を追いかけて捕まえようとするが、しかし鳥はどこかに飛んでいってしまっていないか。そのいなくなった鳥を目で追いかけるという人間の生態。これは丁度、盆栽や華道などの宇宙観の表現方法に非常に良く似ております。つまり、本来は大自然の大きなものを、小さなちっぽけな瞬間の姿に置き換えてしまう。ですから日本舞踊でも本来は時間的にかなり広い範囲のことを「不如

帰」の一瞬に、身体をバラバラに使うことで表現してしまう。これが観客のなかにはすんなり入っていき、すぐ解るといのが江戸時代であった。

さて、その他に日本舞踊で盛んに現れる鳥をもう少しご紹介いたしましょう。おめでたいご祝儀ものの素踊りの「鶴亀」です。これも言葉だけ出てくるものでして、振りの上では全く鶴などは出てまいりません。ですから鶴をやったとしても、袖を広げるだけのことで、前に申し上げたものと同じです。それから水辺の鳥の千鳥が非常に多く出てまいります。鶇もそうです。それから今、神聖の象徴である鶴をあげましたけれども、これと同様のものに鳥があります。この鳥は徹底的に神聖の象徴として出てくる場合と、徹底的に敵の象徴として出てくる場合の二種類ございます。これは皆様ご承知の『三番叟』で、これは能の「翁」からきたものです。しかし田楽の「三番叟」は、誠に鳥そのものを写したとしか言い様のない表現になっております。日本舞踊の『三番叟』のなかの鳥飛びというものは、飛び方は自由で色々ありまして、これは神聖さというのは消えて、専ら観賞用ということが強くなっていると思います。鳥のイメージということだけで申しますと、鳥にはだいたい役どころというものが決まっております。鶯は必ず浮気者として表現されます。つまり主人公が二枚目で、複数の女性に手を出すというような男性を表現する時には必ず鶯が採用されるわけです。ですから千鳥でも、他の何でも、大体がイメージづけられて登場します。それにしても、伝統的な芸能における鳥のイメージ、鳥の位置ということを考えた時に、相当に大きなものを占めるにも関わらず、日本舞踊では、何故にその程度にしか扱われなかったのか、という一つの疑問がございます。この点がどうやらバレエに非常によく似たものがあるのではないかと思います。

わが国で鳥が一つの役目を果たすといった意味で、文字に記録されたものとしては、当然、『古事記』『日本書紀』というものになります。古代日本の葬式において、祝部（ハフリベ）によって行われた祝（ハフリ）舞踊に鳥が登場してきます。このように葬式に鳥が登場する民族というのは日本ばかりではありません。朝鮮、中国、台湾、タイ、インドネシアに至るまで、創始には鳥が何らかの形で出てきます。それから逆に北の方へ行きますとアメリカインディアンなどにも鳥が登場してくるわけですが、これは出てくるだけではなく、人は死ねば鳥になるとも言われております。ですから鳥をやたらに殺してはならないなどということもあるし、鳥の羽には魂が宿っているの、これをお守りにして身につけているということもあります。話を戻しまして、日本では、今や「祝（ハフリ）」という言葉さえ無くなりましたが、

古代においては、葉振り（ハフリ）という葬式で、祝部（ハフリベ）といわれる人たちによって、鳥達の祝といわれる演技がされていた。そして、こういう人たちによって賄われていた日本の芸能の一つの大きな流れが、そこにあると考えられます。要するに、大きな仮面舞踊、つまり、鳥の舞踊が大陸から入ってきて、一旦、わが国の伝統的な穏やかな歌舞が何となく消えてしまうという時期があった。そして、神主が木の葉っぱを振るだけで済ませてしまうという「ハフリ」になってしまい、巫女さんも鈴をつけて葉を振るだけの「ハフリ」になり、そして言の葉を振るといふ、言葉の「ハフリ」というように、だんだんと別の「ハフリ」をするようになっていったということがあります。このような流れがある一方で、元の「祝ハフリ」の流れもあるということで、それには扮装として表れるわけです。例えば、鳥は食物を供える役どころであり、雀は調理師になっています。それぞれに役どころをもつ様々な鳥の「祝ハフリ」の役に扮した人たちが大勢でてきて、死者の生前の偉業を讃えるとか、これから死者の魂を無事あの世に送り届けるという所作を演じてみせるということがありました。それでいて、そういうものがだんだんと違ったものへ解釈されていきます。それでもなお、そういうものも一つの流れとしておりまして、それを名付けて「祝（ハフリ）」の芸、つまり「羽ばたく」という一つの芸の有り様を認めることができるのです。更に、日本の芸能においては、この鳥の羽に対して魚の鱗がございます。鳥が空を自由に羽ばたくというイメージがあるならば、魚が水の中を自由に泳ぐことができるということ。とにかく日本の芸能においては、鳥の羽と魚の鱗、この二本立の芸で、これは勿論二つに分かれるのではなくて、これらを混合して表現されるわけですが、どちらを主にするかということが、民族の血の流れみたいなものから自ずとでてまいります。

最後に歌舞伎舞踊に戻らせて頂きますと、歌舞伎舞踊はこのうちの、鱗を上体とした芸能であると考えます。端的な例で申しますと、日本舞踊の扮装では背中に帯をだらりと垂らしておりまして、これは正しく尾でごあります。それから裾をひきまして、もう片っ端から着物を脱いでいきますが、これは鱗であります。勿論、自分自身が躍動するから動くのではあるけれども、歌舞伎舞踊は、主体は鱗にあるような気がしております。

\*この原稿は記録テープを起こし、御校閲を賜わりました。

\*1979年度春季第7回舞踊学会